

---

# 恋する姫と鋼の男

るー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

恋する姫と鋼の男

### 【Zコード】

Z78460

### 【作者名】

るー

### 【あらすじ】

注意―――この作品は蜀のキャラの大半が絡んでこないかもしれません。

特に桃香は2011年2月7日更新以降は出ないことが確定的です

【ネタ】です！恋姫系列の歴史を参照してますがところどころ違う部分もあります、三国志等の実際の歴史や人物像及び一刀のネタに納得できる人のみお読みください。

元は理想郷で掲載していた  
恋姫英雄戦記になります。

誰がために泣く

舞い散る 桜の花

浸る 酒盃

囲む 三人 朋

桃色 笑顔

褐色……………女豹

金色……………霸王

視界……………一杯……………淡い……………蜂蜜色……………長い髪……………小さな体……………大きな瞳……………  
大粒……………涙……………

願  
い

叫  
び

木  
魂

「二...一...#...-...」  
「わ...一はが...二り...-...二にね...-...」  
「...だから...-...」  
「...」  
「...なる...」

トド  
カナ  
イ  
...

微笑み

諭す

撫でる

「」

鋼鉄の

二度と動かない



## 始まり

荒野

まずは落ち着け

一刀は水に映った「」を驚愕の目で見つめながら想つ

水面に映った人型ロボットのよつなフォルムをした姿……

自身の意識では水溜りを覗き込む行動を起こしているので間違いなくソレが自分自身だと理解した

「一体…なんだってんだ……。」

まじまじと水面に映る姿で確認しながら「」の顔を撫でる

触つてみるものについてのよつに触れている感覚が伝わるが感触だけは金属に触れている感じが伝わっていく

そんな行動をしていい一刀の後ろから声がかかる

「おめえ、めずらしい鎧つけてんな?」

チンピラのような中肉中背の中年の男の声に

「アニキいへ、こいつ顔まで覆い尽くしてんぜへ。」

一刀の正面に回つこみ顔を覗き込んでくる小男

「でつでも綺麗でかつこいい鎧なんだな。」

ふつくりとした大男が一刀の横合から声を上げる

すっかりと周りを囲まれた一刀にチンピラが声をかけた

「おい!…おめえ、その鎧と有り金全部渡せ!…そつすりや見逃してやんせへ。」

下卑た笑い声をあげながら男が一刀に告げる

回つの男共も同じよつこいやーヤと笑いながら一刀を眺める

そして一刀は行動と共に答える

「てめえらにやるもんなんぞ、ビタ一文ねえよ。」

言葉と共に覗き込んでいた小男の右の横つ面に正拳を叩きつけながら立ち上がる

グチャという嫌な音と共に小男の顔面が潰れる… 鼻はありえない方向に折れ、殴った右側の頬が陥没し口からは歯が2～3本飛び出した

「ぎいやややあああつあああ！！！！！」

絶叫しながら顔抑えてのた打ち回る小男に

「チビ～～～～～！」

中背の男… アニキが叫びながら介抱に向かい

「し…仕返しなんだな！！！」

ぶつくりとした大男は丸太のような腕を振つてくる

それに対して一刀は片手で大男の腕の内側を自身の籠手に類似する部分で受け止めた

「いっ…痛いんだな！！！」

ぶつかつた瞬間、鈍い音… 素手で鉄を叩く音… が響き思わず大男は腕を押さえる

「うわい！！！」

一刀の攻撃意思に反応して両腕の籠手部分より赤い三本の長い爪が

迫り出す

そうして一刀はそう叫ぶのが当たり前のように声が出た

「へりうぶやくへりぶく水流爪牙へりぶくへりぱく(へりぱく  
へりたくすいじゆうひんづがへりたくへりぱく)へりぱくへり  
うぶやくへり

大男の腹にクロスさせた一撃を浴びせて斬り付ける

痛いんだな

大声で叫びながら出血する腹を抱えて転がりまわる

「でっ…テク~~~~~!!」

二キ  
介抱していたチビを抱えて今度はテクと呼ばれた大男に駆け寄るア

その捨て台詞と共にデクに肩を貸してスタ「ラサツサとチンピラ共は逃げだしたのであった……

三人組の後姿を悠々と眺めながら一刀は自身の視界に映る各種センサー……意識すれば各種のセンサーが目に映る……に付近の岩場の

影にこれまで三人の生命反応があるの確認する

「ヤレ」の岩陰に隠れている三人出てこいや。」

淡々とした声で祐樹は声をかける

しばらくして

「これは失敬……なにやら物騒な気配がして赴いたのですが、様子からして加勢は不要と判断したので。」

そう飄々と答えるのは薄い青髪に白の着物を着て手に槍を持つ少女

ついで豊かな淡い金髪に人形を頭に乗せた糸目の小さな少女が表われ、さらにショートの黒髪に眼鏡をかけた知的な少女が姿を出す

「そうか……。」

一刀は淡々と答える、その言葉と身のこなしに雰囲気からして腕が立つのであるうと判断した

「しかし、変わった鎧を纏つておられますね……一体どこからおいでに?」

眼鏡をかけた女性が一刀に質問するが

「……他人にモノを聞くときは、まずは名乗るのが礼儀じゃないか?」

一刀はあえて低い声で返す

「……失敬…私は戯志才と申します。」

その言葉に失念していた少女は自己紹介し

「私は趙雲、字は子龍。」

青髪の少女が答え

「風は程立と言いますよ～～～。」

力が抜けるような伸びた声で金髪の少女が答えた

「趙雲に程立だと…………！」

その答えに一刀は驚き言葉が詰まる

趙雲は三国志における蜀の五虎將軍の一員、程立はあの曹操を知略の面で支えた人物の一人

三国志や戦国時代の話は一刀の趣味のひとつため、その名に驚愕し

「それ……何かのコスプレか?」

疑つよつと目で彼女達を見つめる

「「」すふれ?」

風が首を傾げながら問い合わせる

「………… とりあえず、そちらが名乗ったのだから俺もな……。」

「コスプレを理解できていない彼女達にまさは『口から言ひ出した』ことなので名を返す

「俺は北郷…… 北郷一刀だ。」

「…… 北が姓で郷が名…… 一刀が字ですかね？」

戯志才が聞く

「いや…… 俺が居たところは北郷が姓で一刀が名…… 字はない。」

「…… 風貌というよりその珍しい甲冑姿から異国から来られたと思つていましたが、本当に……。」

感慨深げに戯志才は頷いた

「すまないが、いくつか質問していいだらうか?」

「いいですよ~。」

風がのんびりと答えて一刀は質問を繰り出していく……

しばらく質問し、大体の状況等を一刀は掴む

「（つまり……今は後漢時代……およそ黃巾の乱が勃発した184年頃。場所は陳留郊外の荒野と）」

内心で大まかな状況を浮かべる

「しかし……一刀殿の國では真名がないのか……。」

一刀の説明は己の出身国に真名という概念がない」と趙雲が心底頷いていた

「まあな……いいで言つなら君らが呪う真名に該当するのが一万多だな。

驚愕する趙雲と戯志才……約一名はうたた寝しているが……

「初対面の我らにいきなり真名を許されるとは……。」

卷之三

「なれば、」こちらも真名を預けなければ不公平といつもの…私は星と申します。」

趙雲・星が己の真名を明かすが

「国が違えば風習も違うモノだ…君達にとつては重大なことでも俺にとつては些細なことだ…自身が認めた者と親族にしか許していいだろ？…ならば無理に告げなくていいや、君達自身が心から許してもいいと思つまでは字で呼ぶ。」

一刀は淡々と告げて

「心苦しいなら、吾達も北郷と呼べばいい。」

「いえ…山賊三名程度でしたが先ほどの身のこなしから相当の腕を持つてお見受けします、同じ武人として感服しましたゆえでありますので。」

星の言葉に一刀は苦笑する……表情は変わらないが雰囲気は伝わつてくる

一刀は自身の爺様から古くから伝わる古流剣術を幼少の頃から習つてきた、両親を幼い頃に亡くし親戚をたらい回しにされていた一刀を不憫に思い

引き取つた時から稽古を重ねてきた…その稽古とはデッド・オア・アライブ、生きるか死ぬかの一択しかない程の過激で凄惨なものであつた

その一環で一刀は実際に人を斬つたことである…爺様の伝で稽古の試験に中国マフィアを特殊部隊と共に潰すという課題もあつたためだ…

「納得しているならいいぞ……君達は無理に名乗らなくていい。」

前半を星に後半を風と戯志才に向けて言ひ

「…………やうですか、でしたら。」

ホッとしたような表情で返す戯志才に

「へへへへへ。」

うたた寝したままの風

「「寝るなーーー。」

「おおっ？」

星と戯志才が突つ込む

「…………」のナレーション「いつなのかな？」

「「ええ……。」

疲れたかのように二人は口をそろえて答える

先ほどの霧囲気からのんびりとした子だと思っていた一刀はさらに印象を深めた

「さて…………」で立ち話もなんだ、ここからなら陳溜が近いのであらう、できればそこまで案内してもらえるかな?」

そして、ひと段落ついたので一刀は場所を移動することを提案する

「そうですね……北郷殿はこちちらの世界に疎いようですが、袖合口も多少の縁と申します……では一旦向かいましょうか。」

戯志才がそつ切り出し

「そうですね～～～。稟ちゃんの言ひ方とおりですし、風もお兄さんが気になりますよ。」

「ほあ～～～、あの風が男に興味を持つか。」

感慨深げに星がにんまりと頷く

「はいです。もしかしたら噂のお人かもしだれませんしね～～～。」

のんびりとした声で糸田になりながら風は答える

「……あの都で噂の管轄とう占い師が言っていた”天の御使い”か？」

「天より流星が降り注ぐ時、冷たき鋼の体を持ち赤き外套を纏いし者降り立つ。彼のものが向かうは未来……その寄る辺は争乱に満ちる。」

戯志才が管轄の占いをそらんじて三人の視線は前を歩く赤いマントをたなびかせる男を見つめるのだった

## 蜂蜜少女と夢と鋼鉄

陳溜への街道筋

一刀が星達と出会った場所より移動しだしてから約40分程したところで街並みが見えてきた

「一刀殿、あれが陳溜ですぞ」

星が指示示す方角に見える家屋の数々に城壁と城が見える

「あれが……」

その光景を目にする一刀の胸に……何かが過ぎ去ると共に脳裏へと何かの断片が流れ出す

「ぐつ？！」

「いかがされましたか？！北郷殿？！」

戯志才が突如、頭を抱えて呻く一刀に声をかける

「……いや……大丈夫だ」

かぶりを振りつつ、一刀は近づいてくる戯志才を静止させた

「うーん……お兄さんもこちからに来られてから休んでいないよつです  
し……早く向かいましょうつか。」

風がそよいで先頭を歩き出す

やつして一行は門の前まで来たのだが……

「駄目だ、駄目だ！！」

一人の門番に足止めを喰らつてしまつた……

原因是今の一刀の姿にある

一見、珍しい全身鎧を着けている様に見られるため中に入るためには一度脱げと

陳溜はこの時代では大きな都市に分類される土地ゆえに不審者が入らないようにするために

「ヤニをなんとか通してもらひませんかね～～～」

程立がやんわりと門番にお願いするが

「できんなーーーどつしてもとこつなり…………」

いやいやしながら手で形を作り出す

「下種が……！」

その形を見た星は憤り、持つていてる龍牙を軽く回すが

「やめろ、子龍！！」

「ですが一刀殿……！」

「いい……俺は駄目でもこの彼女達は大丈夫だな？」

「あつなにいつ……ひつ？！？！」

言い返そうとする門番を威圧し。

「大丈夫なんだな？」

イエス以外の言葉を封じる。

「あ……ああ」

相方の方がなんとか言い返す

「だそ（う）だ…………！」でお別れだな

「なつ？！何を仰る！？私はまだ話を聞いて『やめらし……そもそも真名を許したのに字で呼ぶとはこれいかに……』

星は荒れ一刀へと詰め寄り。

「風もまだお兄さんとお話したいことが一杯ありますので……、

「……………」

糸田になりのんひりとした口調で風が答えた

- 1 -

志才は成り行きを見守っていました

一  
だがな

一刀が口を開きかけたその時、ガラガラと後方より馬車の音が聞こえてき

そちらの方に一刀は顔を向けると窓の部分に当たる場所から蜂蜜色の長い髪に小さな顔で大きな瞳を乗せた少女と目が合った

なにやら一刀を視界に納めた少女は感嘆の声を上げながら一刀を指差し

「七乃！七乃！！止めてくりやれ！！」

はしゃぎながら少女は中に引き込み、同乗している濃い水色の女性に指示する

「どうかしましたか？お嬢様？」

頭の上に？を浮かべながら七乃と呼ばれた女性は馬車を止め、止まつたと同時に少女は扉を開け放ち一刀へと一直線に駆け出す

「つてお嬢さま?」…………考へたら「なに」も素敵ですうううう

驚きの声を上げながら七乃是少女が走つていった前方を見て、一刀を視認すると体を少しきねらせながら少女を追うべく駆け出した

「ふねねねね～～」

再度感嘆の声を上げながら、少女は遠慮もなしに一刀を観察する

「君は誰だい？」

小さな少女にジロジロと見られて、たじろぎながらも一刀は優しく  
問い合わせる

さすがに小さな少女ゆえに不躾な行動を頭ごなしに言つてもせんないことだと納得しての言葉だ

「ん？妻か？妻は美羽じゃ！荊州の太守とは妻のじとじやぞ……！」

えつへんと無い胸を反らしながら少女… 美羽は宣言する

「さすがお嬢さま！誰とも知らぬ人にはつさり自分の身分と真名を明かす！よつ！この大陸一のスカポンタン！」

褒めているのか、貶しているのか、わからないセリフを吐く追いついた七乃

「うはははははははーーーもつと褒めてたもーーー」

そんなセリフでも意氣揚々と高笑いを浮かべながら見守る美羽に

一刀達はなんとも言えない表情を浮かべながら見守るのだった……

「で……君は俺に何かよつかな？」

高笑いが終わったのを見て

先ほどの美羽と言つ名からして一刀は真名であると推察し、君と呼びながら美羽に問いかける

「うと……名を告げてなかつたな、俺は北郷一刀と言つ」

「お主は北郷一刀といふのか～～～、して一刀とやらお主の鎧はすごいの～～綺麗なのじやー」

ペタペタと美羽は一刀の鎧の体を触るが

「おお？！？！なんだか温かいのじや？！」

手触りは鋼鉄なのに手から返つてくるのは人肌と同じ温もり

「それに……なんだか心が暖かいのじや……」

ぽつりと美羽が漏らす

彼女の心の中に、何とも言えない心を満たす暖かさが広がり

全身で一刀の右足に抱きつく

「お嬢さま？！」

「「一刀殿？！」」

「…………」

三人は驚きの声を上げ、一人は何故かお休み中……

「七乃！一刀を連れて行くぞ！！」

そうして驚きを上げている者達に田もくれずに美羽は一刀の右足から離れて、マントの裾を握りながら宣言する

「おおおおおお、お嬢さまああ～～～～？！？！」

七乃是素っ頓狂な声を上げ

「なんじゃ？七乃」

首を傾げる美羽

「…………ちょっと待ってくれ」

自分を置いて話が進むのに耐えかねた一刀は口を挟むが

「お嬢さま！－！ダメですよ！－こんな不得体の知れない人を連れて行く

なんて…」

口調はのんびりとしたものがあるが強めに美羽に言つて聞かせよつとする七乃

「いやいやーいやいやー連れて行くといつたらー連れて行くのじやー…」「

駄々をこねて地団駄を踏む美羽、マントの裾を握りながらなので一刀は少し引つ張られる感覚するが微々たるもの

ゆえに事態を收拾しようと美羽を抱え上げて話しに割り込む

「ほわあー…………暖かいのじやああーーー

抱え上げられ、そのまま抱つこの姿勢となつた美羽は恍惚とした表情でつぶやき

「いやああつあーーーお嬢さまーーー

涙目で一刀を睨みつける七乃…………事態が悪化したのを見咎めて戯志才が話しうす

「とりあえず…………名のある方とお見受けします。私の名は戯志才、話は街に入つてからでもいかがですか？」

相手の身なりから推察し、戯志才是彼女達と一緒に街に入ろうと話を振る

「…………はあー、わかりました。中でお聞きしましょー…………今のも

まだお嬢さまも離れてくれないです……」

七乃も状況を推察し、美羽の様子と一刀達の様子からその方が良いと判断して門番に話で一刀達共々中に入ることになった

ちなみに移動中、抱っこされている美羽は終始「機嫌で……降ろそ  
うとすると黙々をこねたため仕方なく……その様子を見ていた風は  
羨ましそうに美羽をこつそり糸田で見ていたのであった

### 陳溜 料理店

やつとのことで陳溜へと入れた一刀達は七乃の先導でこの料理店へ  
とたどり着いた

さすがに七乃が若干、美羽をしかるように諭したおかげで現在一刀  
は抱っこから開放されている

「さて……まずは各自の自己紹介から始めましょうか～～

全員が椅子に腰掛けて一息ついたのを確認した風が音頭を取つて話  
し始める

「とりあえず、私からですぬ～～～風は程立と申します以後お見知

りおきを～～～

間延びした声で七乃と美羽に挨拶し

「戯志才と申します、以後お見知りおきを」

戯志才も簡単に自己紹介して

「私は北方常山の超子龍」と、趙雲と申す

すまし顔で星は言葉を放ち

「で、俺が北郷一刀だ…異国から来たのでこちらのことに疎いのでは…粗相があれば勘弁してくれ」

最後に一刀が自己紹介して一刀達の自己紹介が終わり

「…私は張勲と申します。こちらにおわされる方が先ほど仰った通りに荊州太守の袁術様であられます」

つまらなさそうに自らと美羽の自己紹介をする七乃

宿について一刀が席についたの見計らって、美羽が駆け足で一刀の横に座つたのが面白くないのだ

今も何かと一刀へとちよつかいを出している

「やはり……袁家の方でしたか…」

戯志才が納得する…なおも馬車に付いていた家紋で十中八九当たり

をつけていたが

「では～～まずま、お兄さんの話から聞きましたよ～～

「おい、風～～」

星が風に詰め寄るが

「まあまあ星ちゃん、ここはお兄さんのためでもあるのですよ～～  
…といひとじでお兄ちゃんお詫、聞かせてもらひついでい～ですか～～？」

風は星を落ち着けながら話を一刀へと振る

「…聞かせるとこ～てもな…結論から言つと事故で俺は」ひりて  
たんだ…日本という国からな」

「日本……ですか？」

戯志オガ訝しげに尋ねると

「ああ…この大陸から海を渡つた島国にあるんだがな……そこから  
俺は来たんだ」

未来からなとこ～葉は心で咳きながら戻れる一刀

「すむと、一刀殿は海を渡つていられたのか？！？」

「ほほ～～お兄さんすい～ですわ～～

星が素つ頓狂な声をあげて風が驚いているのか判断に困る間延びし

た声を上げる

「七乃？海を渡るとは大変なのかえ？」

「はい～そうですよ。お嬢さま」

美羽がやつと構ってくれたため七乃是上機嫌で答えた

「まあ…………な」

歯切れの悪い声で一刀は答え

「で、事故とはどうされたのですか？」

戯志才が事故について言及すると

「色々とあつてな……気が付いたらあそこに放り出されていたんだ

……」

「そりですか…………」

何かを考え込むように伏せる戯志才に代わり今度は美羽が興奮した  
声を上げながら一刀に迫る

「なら、一刀はどうにも行くといひがないのかえ？！」

「なんと？！いつもアンポンタンなお嬢さまがある意味確信部を突  
くとは？！？！」

七乃が心底驚いたという表情を出して声を上げた

「ああ……まあな……」

その迫力に若干押されて、一刀は額く

「ならどうひじや？——妾の近衛にならんかね？——」

興奮冷めずには笑顔で下から見上げるよつに見つめる無茶ばかりに嘔  
葉を放つ

「妾は荊州の太守にして、かの三公を輩出した名高い袁家なのじや  
——何一つ不自由せんぞよ？」

「さすがお嬢さま……こんな不審者を後先考えずに召し上げられよ  
うとするとは。よつてこの大陸一の考えなし」

「うはははははは……もつと褒めてたもつ~~~~~」

七乃の悪口もなんのと高笑いを上げ、やつして上田遣いで一刀  
へと美羽は迫る

「どうじや？ 一刀」

その言葉に一刀は、一度周りを見渡すと

風はいつもと変わらず寝ている

戯志才は難しい顔で、今だ考へてゐる様子

七乃は一ノ二ノしながらも油断なく一刀を見ている

星は飄々と龍牙を手入れしている振りをしながら机に向っていた

「…………」

正直に言つと一刀はこの話を受けよつと思つてこる

今現在、一刀はこの見知らぬ土地に一人で放り出されている状態だ  
路銀もなく寝床も食べる物えない……なおもこの体が食事を必要とするかは、まだ定かではないが……

袁家といえば三國志でも有数の金持ちの家、そこに拾つてもうえた  
なら衣食住においては当面なんとかできるはず

美羽自身は幼い少女で今までの話しづらすると裏がなく、単純  
に自分に興味があるゆえの行動と納得できる

興味が尽きれば、放り出されるかも知れないがその間になんとか、  
身の振り方と路銀を稼ぐことはできるはず

一つ注意しなければいけないのは……

そつして一刀は七乃へと視線をやると

「…………」

二つひとつこちらに笑顔を浮かべるが一刀には腹に何かを抱えてい  
るようにしか見えない

だが、そこさえ注意すればなんとかなると決断して声を上げる

「ああ、わかった。袁術……殿といひに厄介にならせてもらひ

その言葉に美羽は花が咲くような笑みを浮かべて

「さすが一刀じゃ……！七乃！蜂蜜を用意するのじゃ……いまから宴なのじゃ……！」

大喜びで声を上げながら七乃に宴の準備を指示する

「は～い、わかりましたあ～」

七乃是返事をすると店の人יכוןと料理を持つてくるように囁か

そうして一刀は再度、三人の方に顔を向けると

戯志オは先ほどと変わらず

風は糸田で一刀を見つめている

星はニヤニヤと一刀を見つめながら出される酒を煽っていた

そんな三人に視線やつている一刀に美羽が胸元にダイブしてくるが

……

「おおお……！痛いのじゃ～～」

元気よく飛びついたのが仇となり顔面を強かに打ってしまう

「だ……大丈夫ですか？袁術様？」

自らの主人となつたため、堅苦しい言葉遣いになる一刀だが

「むう～～！一刀！そんな堅苦しい言葉遣いではなく普通に話してほしいのじや！それに妾のこととは真名の美羽と呼ぶのじや……それと一刀の真名を教えてくじやれ？」

額を押さえてふう～～と頬膨らましながら美羽は一気に言葉を放つ

「…………わかつた美羽。それと俺の国では真名という概念がないんだ、ゆえに一刀が真名に当たる」

「うんむ、苦しうつない つて初めから真名を許しておつたのかえ？！？！」

「君ら風に言ひとやうなるな……」

肩をすくめながら一刀は告げると

「なんと……すがは妾が認めた者じや」

上機嫌になり一刀の首根っこに腕を回しながらすり抜つとその空間に収まる

刀の一刃はこれからは名乗るときは苗字だけにしておつと決めた

翌日 陳溜 門前

あの後、食事を取つた一行……一刀は試しに食事を口に持つて動作をすると勝手に口元の装甲が上下に分かれて口が姿を現したが内部を水に映したところ機械が蠢いていた

このことから一刀は自身の体が鋼鉄になつていると確信して落ち込むが美羽が悲しそうな顔でこちらを見つめてくるので、なんとか棚に上げて現状に意識をやる、なお食事は食べられて味覚も満腹感もしつかりと感じられた

そうして七乃が取つっていた宿に星達も案内されて一泊どり、現在は昼となつて出発と相成った

「さて、これで準備は完了しましたし行きましょうか～お嬢さま」

七乃が馬車等の準備を済ませて美羽に声をかける

「そ……そつじゅの……」

なぜだか美羽は気乗りしないようだが七乃に答える

「そういえば……どこに向かっているんだ？美羽」

一刀は目的地を美羽に聞くと

「ひつ！」

変な声を上げて一刀の足元に縋り付く

「か……一刀……聞くでない……」

涙目になりながら一刀を見上げる

「え……とですね……一刀さん北方のことは存知ですかね？」

「まあ……大まかなことなら……たしか今は袁招が治めているだつたか  
？」

七乃の言葉に一刀が答えた

「ガタガタブルブルガタガタブルブル……」

なぜか美羽は震えだした

「か……かすと……いじわるしないでくりやれ……」

涙声に舌足らずな言葉で一刀を見つめる

「うう……うれは……？」

「あ……その……お嬢さまは袁招さんが苦手で……」

「び~~~~~！――」

七乃の言葉に一段とビクツと反応する美羽、そして周りをキヨロキヨロと見回しだす

「れ……麗羽姉さまは居らん……よな？」

「大丈夫ですよ～～お嬢さま～～。袁招さんは居られませんよ……といつよつこれから伺いに行くんですから……」

七乃が美羽を宥めながら目的地を明かす

「ひつ――……ひつ――……今度は何のよくなじゅう……麗羽姉さま……」

肩を落として美羽がポソリと呟く

「さあ……私にもさつぱりで……」

七乃も困った顔になりながら答える

渦中の外に居た三人が口を挟む

「といひことは……あなた方は袁招殿の所に向かうと……」

戯志才が声を上げると

「ですね」

七乃があつやつと答える

「……」  
「ちつですか……我々は田的で違つたので……」

「？はいそれが？何か？お好きなよつこじてへだせこ～」

七乃はまつたく興味あつませんといつ顔で答える

その言葉に睡然とする戯志才だが氣を取り直して続ける

「では、いじいで……北郷殿、お話できて幸いでした。御武運を」

そう言つて一刀に別れの挨拶を切り出すと

「ああ、世話になつたな。戯志才も元氣で」

続いて星が言葉をかける

「一刀殿、次の機会にはぜひ手合わせを願いますよ……あとちやん  
と真名で呼んでくださいね」

「わかつたよ……子…星」

子龍とすべりになつたといひに星の鋭い睨みが飛んできたので  
咄嗟に真名で返した

「では」

そして星が離れるとき度は風が前に出てくるが……

彼女は一向に口を開く気配を見せない

「どうしたんだ？程立？」

その様子に一刀は訝しげに風を呼ぶが

「はあ～～～～……お兄さんはわかつてないですね～～」

深いため息をつきながら風は口を開きだす

「まあ、いいです…今後それは改善していけばいいので～～～」

そうして言葉を発すると突然、風は臣下の礼を取つた

「「「「「なつ?...」」」」

その行動に全員が驚きと戦慄に包まれる

「程立?...何を...」

一刀は驚き、彼女を立たせようとするが

「昨晩、風はハツキリと夢を見ました」

たいして大きくない声だが不思議と一刀は言葉を止められた

「風が……赤い外套を追う夢です」

その言葉に場の雰囲気が変わっていく

「風はそのはためく外套を追いかけていました」

淡々と紡ぐ言葉にみな引き寄せられる

「風が追い続ける間も情景は刻々と変わっていました……あたり一面真っ赤な血で染まる大地、暗雲立ち込める空、轟々と燃える家々、倒れふす人々」

「ですが」

そうして風が顔上げて一刀の目を見つめる

「赤い外套が過ぎ去った後は緑生い茂る大地、蒼穹の空、暖かなぬくもりを放つ家々……笑顔を浮かべる人々」

「ですが……反対に赤い外套はどんどんと黒ずんでいきました。自身が流す血によって」

「思つたんですね。」の方が風がお仕えする人だと……この乱世を導く方だと」

「だからお兄さん……いえ、『主人様』この私、名を程立から改めまして程赤としあなた様に仕えることをお許しください」

再度、臣下の礼を一刀へと捧げる風に周りは動けず、そして一刀は口を動かす

「頭を上げてくれ……程立……程赤、いや風」

一刀の言葉にようやく風は立ち上がり、一刀を見上げる

立ち上がりた風の眼差しを一刀は強く見つめてかぶりを振る

「…………その目を俺は知っている……何か”を決めた者の目だ……」

「そう一刀は呟く程に、力強い風の目は現代に居た頃の戦いの中で時折見ことがある目と同じであった

「正直……風が言つような……大それた人間じゃないさ……俺は」

自嘲気味に笑いながら一刀は告げるが風は……

「…………言つて聞くようじやないよな……本当にその目をした奴は厄介だ……」

脳裏にある女性が描きながら呟く

「…………いいのか？」

「いいも悪いも風が決めたことですよ～～～お兄さんにも覆せないことですか～～」

そういう風に観念した一刀は

「何が……できるかわからんが……ようしきな」

そして手を差し出し

「は～～～」

差し出された手を掴む風であった

一刀が墜ちてきた場所 クレーター中心部

「……かしら？」

金髪をサイドにクルクルと分けた馬に乗った少女は疑問の声を上げると

「はっ！華琳様、ここになつております！！」

傍らにいたりも馬に乗った長い黒髪女性が華琳と呼ばれた少女に答える

「しかし、何があつたのでしょうか……これほどの大穴が開くとは

…

黒髪の女性の反対側に居る青髪の女性も疑問を浮かべる

「そうね……春蘭、秋蘭、付いて来なさい

「か、華琳様！」

そういうて華琳は馬を駆つてクレーターを駆け下りていき二人はそれについていく

そして彼女が降りた先には一刀達が居た頃には見かけられなかつた一本の鞘に収まつた剣が大地に突き刺さつていた

## 蜂蜜少女と夢と鋼鉄（後書き）

ダイバーに詰まつたり、気分転換に書いてるので  
更新はかなり不定期になります……

一人の少女が外套を纏つて

クレーターを観察していた

「い」主人様……」

漆黒の艶髪を風にたなびかせる、その少女の名は関羽…… 真名を愛紗と呼ぶ

「いす」「へ……」

もの憂げな表情を浮かべる彼女が思い浮かべるは優しき少年の姿

想いを馳せ、今までの軌跡を思い返す

左慈・千吉が率いる人形の軍団を切り抜けて辿り着いた場所たる祭壇

主たる一刀が鏡に触れたことによつて…… 全てがオワリに向かつた

消えていく一刀

ただ、その身を引き止めたくて愛紗は懸命に駆け寄った

否。愛紗だけではない… 星、鈴々、翠、朱里、紫苑、一刀の寵愛を受けたこの場に居る者全てが

懸命にその腕を伸ばしていた。が

それをあざ笑うかのように左慈の一撃が次々と仲間達に振るわれていった

平時……戦いの中において決して後れを取らない程の腕を持つ武将達である彼女達も

田前で消えようとすむ愛しき者へと全てを向けているために、避けることできずには凶刃に倒れ伏していく

朱里、紫苑、翠、鈴々

次々と倒れ伏していき……消えかけた一刀へと辿り着けたのは愛紗のみ

懸命に走りより藁にも縋る気持ちで手を伸ばすも

それすらも一蹴するがごとくに

伸ばした手は……トドカナカツタ

ただ、消え去るその瞬間

「愛してゐる」

声はひからで届かずとも

その動いた唇を一字一句間違えずに読みどれ

視界は闇に覆われた

「気がつけば……時を遡り、私は始まりの地に居た」

未だ、流浪の身で用心棒の真似事をしながら日々を送っていた頃へ  
と愛紗の意識は戻つていた

「これが……天の采配か、地獄の悪夢かはわからんが」

最初はひどく驚き、ついで一刀を捜し求めるも手がかり一つすら掴  
めず

途方に暮れたが……時を遡つてゐることに気がついた時

愛紗はいつ思つてしまつた

「今度こそ……守り抜く……そして、あの『龍愛』の身だけに注いでいただくな！」

かつての志高く誇りに満ちた瞳は……暗い瞳へと化し

「私から『主人様を引き剥がす道は要らない』

何を見、何を感じたのか……かつての愛紗とは掛け離れた雰囲気を醸し出し

「だからこそ、私は鈴々を捨てたのだ……あ奴は私から『主人様を奪うから』

かつての義妹との出会いも捨てた

脳裏に浮ぶ無邪気な笑顔を向ける鈴々へと心の中の愛紗は冷徹な視線を向けてコワス

そうして浮かび上がった……皺くぢやの老婆の言葉を思い出し

無数の蹄が残るクレーターを後にして彼女はこの場を去つた

陳溜から冀州の道中

当たり前だが空は満点の星が煌いていた

「……ちがうな、当たり前じゃない。俺が居た場所は星なんて殆ど見えなかつた…」

大地に背を預けて仰向けに倒れ伏す一刀はそう呟く

時刻は月が星と共に淡く輝く夜、一刀達一行は野営を取っていた  
「やはり……ちがう世界なのか?……前に香港に来た時だつて、こんな本当に天の川つて言える程の星は…」

虚空へと消えいく言葉

脳裏に描くは昔、修行の一環で立ち寄った香港

そこで出会った薄い桃色に灰がかかつたようでありながら風に吹かれれば、しゃなるような音を響かせそつと長い髪を持つ褐色の女

あの街で出会い、紆余曲折があつたが……一年も共に居た女性

「お前は元気か?」

「俺は……」

満点の星空を女に見立てて内心の気持ちを誤魔化すかのように吐く

そつ砾をつつ自身の体を眺め……拳を握る

「俺は……どうなつたんだろ?」

常の一刀では考えられない聲音を洩らす

無理もない……気づけば身一つで見知らぬ場所、その場所とて考えられないほどに文明の発達していない場所

聞けば聞くほど元の知識にある三国志の時代背景の国

極めつけは…

「…………」

握った拳の感触はまさしく鉄を握るとほりこりとかと、頷きたくなる程……硬い感触

水に映つた自身の鋼鉄の体は紛れもない真実

状況に流され、超雲・戯志才・風に連れられて陳溜に辿り着き

運よく美羽に拾つてもらう…

ようやく今日が終わるところの時間

この体でも睡眠を欲するのはたしかだ。先ほどから瞼が重く感じるが

「寝られるわけないだろ?」

食事を取りることもでき、睡眠を欲す…人として当たり前のことだがこの体は欲す

しかし中には鋼鉄の体で再現できないことは欲さない。普通なら人のサイクルが崩れれば精神の均衡が保てず…死んでしまうところが無意識の内にコレが正常だと体が自覚しているかのように違和感がなかつた

「…………くそ……」

ただ小さく悪態をつき

隣に一刀の赤いマントを布団代わりにしがみついて眠る風を見つる

「何一つ、先立つモノを持たない俺について来るとか…君は正気なのか？」

その長く豊かな淡い金髪を梳きながら呟く

「…………ご主人様は風の決断を疑うのですかね～～？」

いきなり、パチリと目を開けて真摯に一刀の目……赤のツインアイへと向ける風

「風？！？！」

「はい～。ご主人様の風ですよ～～あんなことも、こんなことも好き放題に出来る風ですよ～～」

「ねつねつ、兄ちやんついやましこいひ」

普段より三割も増したようなまつたうとした口調で返す風と

風の頭に乗つかつた宝?が突つ込む

「起きていたのか」

「いえ、九割寝てましたね……」

アクビしながら返す言葉に引きつる

「タイミングが合いすぎだね?……」

「たいみんぐ?」

「いや、なんでもない」

一刀から出た見知らぬ言葉に反応し

「やはり、『主人様は異国……いえ、天界からやつてこられたので  
すね』

風は目を細め

「天界つて……言つただろう風?俺は日本という國から海を渡つて  
この大陸に來たと」

「やうですね。たしか事故とも

「そうだ」

一刀が肯定すると風はおもむろに人差し指を立てる

「だとすると、おかしいのですよ~」

人差し指を振り

「（）主人様が居た場所は海なんて、とんと縁のない辺鄙な場所…むしろ内陸地帯。さすがに海から事故でそこまで飛ばされるはずがありませんよ~」

「それに……風達の名を聞いたときの驚きよつ。たしかに星ちゃんはちょっとした有名人ですが…それでも一地方ですこし名が知られているだけ」

いつも欠かさず持っているキャンディー棒をビシッと一刀へと指し

「袁術様はたしかに大陸中に名が響く名門、袁家の方。しかし、それでも大陸の外へと名が響いていとは到底思えません」

「…」

風はよく自分を観察しているのか…一刀は率直に思つが

「まあ……でもこれ殆ど風の推測なんですねけどね。根拠なんてありませんし~」

指してたキャンディー棒を口に含めて糸目で流した……

「つまおーー！」

思わず浮かしかけていた背を大地に落としてしまつ

「ですが」

今度は額と額が当たるほどに接近してき

「図らすも当たりのようですね。」主人様の態度はわかりやすいですよ～」

グリグリとその柔らかな頬を寄せてくる

「そのような厳つい仮面でも表情が駄々洩れですよ～。そんなに悩む」とじやありません

おつとりと言い含めるように風は言葉を紡ぐ

「風…」

「悩んでも解決できそつにはありません。それに風は」主人様がどんな姿でも風の「主人様に変わりありませんよ～～」

間延びした言葉に

「……ありがとつ」

「なんだか、わかりませんが～どつも～」

「ナビ」

「けど？」

「…ご主人様つてのは勘弁してくれ」

心底疲れたよいな聲音で伝えると

「ですね。なんだか風も違和感しかないのですよ……お兄さんでもいいですかね～～？」

「なんでもいいよ……ご主人様じやなれば……」

「では、お兄さんと呼ばれてもらいいますね~」

主従関係ではありえない光景だが……当人達が納得しているので問題ないだろう。と思う

「ふわあつあ~~~~~」……こんな時間に風が起きているのが奇跡ですね。寝ます

言つだけ言つて、そのままコテンと一刀のマントに包まつて眠りだす

「ありがとうな…風」

翌日

夜が明け

一向は袁招が居る地へと向かう道中

「すみれのじや……程赤だけ、すみれのじや……」

やんやんやんやと黙々をこねる美羽

昨夜、七乃がやんわりとした表情でありながら田の色が完全に表情  
とちがい

それにビビッた美羽はその時も黙々をこねていたが即座に首を力く  
力くと振つて馬車で七乃に包まれながら床に就いたが

今朝は早速一刀と話さうと、普段では考えられない早起きをして七  
乃の腕から這い出して馬車から飛び出すも……

目前に映る光景

一刀の赤いマントに包まれて一人、身を寄せ寝る姿に思わず大きな叫び声を上げた

そこから顔のようないつあることか…とすりと喰いていた

「ですが～～袁術様が来られなかつたのが悪いかと～？お兄さんは特に同衾を禁じておられませんでしたし」

「ふつつつー？！？」

同衾と言つ葉が風から飛び出し、一刀は吹く

「わああああん…！…妾も一緒に同衾したかもおつおおお～～～！」

大声で盛大に手足をバタつかせて喰き

「一刀は妾の近衛なのじや…！…今日からは一緒に床につくのじや…！」

馬車の席に仁王立ちをかまして一刀へとビシッと人差し指を指す

「お・じ・ょ・う・わ・せ？」

「ひつ…………な、な、な、ななのに言われても決定たも…！」

小さな悲鳴をあげるも最後まで言い切る美羽

「お…お嬢様…？」

今までにない対応に驚く七乃

「決まりといつらきありはの……」

テンパリながらも美羽は「」の主張を決定すると

「お兄さん……ちょっと大変なことが起きてるようですね……」

のほほんと騒動を横から眺めていた風が

少し困ったといつ聲音で馬車の窓から見える外を指す

「なつ……」

前方に見える村と思われる場所から火の手が上がっていた：

風がかかる時　嵐（前書き）

思つたよりか筆が動かない…

スランプつていうより、書きたくないのが強いのか…？

しかも、量少ない…

## 風がかかる時　嵐

「くそつー。」

悪態一つ付いて鋼鉄の男。一刀は走り出す  
黒煙を上げる  
場所へと

「か、一刀？！ビービー行くのじゃ？！妾を置いて、ビービー行く  
のじゃ？！」

駆け出していく一刀へと美羽が叫びを上げると

「美羽！わからないか？！」

立ち止まり美羽の方へと顔を振り向けてそいつ声を上げて

その顔を再び前方……黒煙が立ち上る村落へと向けた

「なぜじゃ？！一刀と妾には関係ないじゃね？！」

美羽の叫びに

「たしかに……関係ないさ……！だがな、美羽！」

一刀は向かつていた道を駆け戻り……美羽の視線と視線が絡み合つ  
同じ位置まで腰を落とし

「俺は……！」目の前で起きている惨劇から眼を背けるよつた、男にはなりたくない」

鋼鉄の顔は何一つ表情を変えはしないが……そのメタルエコーが掛かる聲音には力が籠つていた

「……」「……」で、眼を背ければ……俺は何の為に力を手にしたのか……

### 思い描くは原初の記憶

炎に包まれた中をひたすらに駆け走りながら、己の視界に映るは顔を失つた二人の男女

「だから俺は行く

思い描くは幾多の戦友達。褐色の肌に薄い桃色に灰がかかつた長い髪を持つ女

幾多の友と女と共に駆け向けた戦場

「逃げる翼も……あがらう牙も持たない人達が　　血に伏せない  
よつこ、笑顔で居れるよつこ……」

思い描くは女と過ごした日々

酒が大好物で浴びるよつこに飲んでは親友にどやされ、一刀のことをよくからかつていた女

その性格からは考えがつかないかもしけないが……世話焼きでお年寄りや己を頼つてくる者に笑顔で接する女

家の家督を引き継いだゆえに…… 酷く、口を捨て家に貰へす女  
そんな重圧に耐え切れず、流した透明な涙を拭つゝすがり…… 流し  
たことすがり、わからなかつた女

「俺は行く。美羽と風は張黙と共にここに残してくれ」

「か……かずとおお～～……」

涙田になつてしまふくれる美羽。しかし、一刀が告げた言葉に名を  
呼ぶ以外のことを見やる」とはできません

「…………ちやんと歸つてきてくださいね。お兄さん」

いつも通りと言つてもいい糸田　　だが、その小さな瞳は真摯に  
一刀へと向けられる

一刀は跳ぶよつて顎け出す

炎上する村落が見える

傍目から見ても、寂れ……略奪しようと思つても何もないと思える程にみすぼらしい村なのに

それでも、賊　　頭や腕等に黄色の布を巻いた男共は残された微かな食料や金品を奪つていく

こんな村まで襲わなければいけないほどに……賊すら貧困にあえぐのが今のこの国の現状

そして……

「くそっ！佐和も真桜も居ない時に！…」

そんな賊共から……村人を護るのは

癖の強いくすんだ銀髪をつなじから二つ編みにし、薄褐色の肌に所々……傷を持つ少女　　楽進・凪

武人を志す少女は会得した氣の技によつて敵対するもの達を倒していくも

「数が……多い…」

彼女の後ろに居る多くの無力な村人達をたつた一人で護りながら

「かかか……おい、コイツ結構な女だぜ？」

「一気にかかりや、いくら『イツ』でも無理だろ？」「

「さんざん、仲間やつてくれたんだ…その体で払つてもらひやうか」

下卑た笑いと下種な言葉に厭は

「誰がお前達など…！」

犬歯をむき出したとして威嚇するも、じりじりと賊共は間合いを詰めてくる

普段ならば……歯牙にもかけない者達に追い詰められるのはやはり、無力な人々を背に戦う為

しかし、厭には

この身に変えても貴様らに指一本触れさせん！

背後で身を寄せ合つて震えるしか出来ない人々を護るために

絶対に護つてみせる！

武を身につけ、体中に消えない傷を刻み付け、閻王を纏つて…真っ直ぐに生きる少女を

賊共が一斉に襲い掛かる

「烈火刃」

それを　　鋼鉄が見過ぎるわけが無い

「ぎやあ！」「げえ？」「ぐへつ！」

下種が上げる悲鳴には品性がないのは世の常

その身に飛来するのは鋭利な刃物……苦無

容赦なく男共を刺すと

「あ、あちいいい？」「あががががが？」「腕が？！腕が燃えて  
？！」

罪に濡れきったその身を浄化せんと業火を迸らせる

一人は足に刺さりそこから燃え、一人は喉に当たり瀕死の所を業火  
が瞬く間に冥府へと送り、一人は腕が火達磨に包まれていく

「女と弱者に集まる奴は……何処にも居る者だな！」

メタルエコーが掛かつた怒声を上げて一刀は烈火刃を放つた姿勢  
身を低くして疾走する体勢のままに…

残りの賊共へと切り込んでいく

「出る！爪ええ！！」

蒼く光る…朱に染まつた爪。水流爪牙をむき出しながら

「そこの銀髪の少女…！後ろの人達を連れて俺が来た方向へと行けえ…！」

銀髪の少女たる凪へと声を上げ

「野郎お…！」「やつちまえ…！」

襲い掛かってくる賊共を抉つていく

「…」助太刀感謝いたします…！さあ、みんな速く…！」

問答する暇が今は無いのは凪にもわかる

正体不明の全身甲冑の……口調から男と推察できるも、聞いたことのない声音 メタルエコーが掛けた一刀の声に

一瞬、躊躇するもすぐ様に行動へと入る。今は一分一秒でも無駄にすれば…即、死に直結する場面

「逃がすな…！」「「「「「「おうよー！」」「」「」「」「」

一人の賊が声を上げて、凪たちの逃亡を堰き止めよつとするも

「行かせると思つか？」

悠然と血に濡れたかのように朱に染まるマントを翻し、水流爪牙を構えながら一刀が立ちふさがる

一 拍の空白の後

「えりやあああああ……」

みすぼらじに剣を両手で構えて、唐竹割りを仕掛けてきた賊の一人をかわしつに……一気になだれ込んでくるのを

「行かせんと言つた!」

両の水流爪牙で迎え撃つ

迫りくる唐竹割りを身を翻して避け、返しとして右の爪でその喉笛を切り裂き

その合間に近づいてきた者左の爪で片腕を切り裂く

「ひぎあああつあ!俺の!俺の腕!……!」

襲い来る激痛と信じられない現状にその男が持っていた古ぼけた剣が落ち

「おつやあああ!」

正面から続いてくる者に……落ちた剣を思いつき蹴飛ばして

「げペ」

その柔らかな喉笛に刃の部分をめり込ませると

一刀は迷わず……剣の柄を持つて一気に引きちぎるかのように切り裂くも

「くつ……？」

思わず呻き声を上げてしまつほどに あっけなく拾つた剣の柄は粉碎され、刃は半ばから折れた。一刀の手によつて

「ちつ……どれだけ脆いんだ？！いや、俺の握力が半端ないのか？」

戸惑いの声を上げつつも迫り来る者達を両の爪、水流爪牙で切り裂き、もう一度相手が持つ剣を奪つて使うも

「ぐげえっええ！！」

「同じか！！」

今度は相手の胴体へと突きを放つと……たしかに、貫くも柄の部分が折れてしまい、賊の男の体内に刃が残された状態となる

槍を持つても、斧を持つても 結果は同じく、自身の体が装備する。水流爪牙と烈火刃以外は近く壊れていく

「つぐづぐ」の体は……！」

歯軋りしつつ一刀はそれでも迫り来る賊共を屠つていき

「ちつ……一番の獲物が無いのが辛いが……これで越えるしかない

か！」「

両の腕から生えていると言つてもよい水流爪牙を二桁に届くか届かないかまでに減らされた賊共へと円を描きながら構え

「水流爪牙！！」

「ぐく自然に……洩れ出る言葉のままに一刀は身を捻り出す様に回転させながら

掬うつよひこ一 手を繰り出した後、スクリューのよひにて群がる賊共を刈り殺していく

「はつ……」

最後の一人を爪を左右に振り払つように広げて 終幕とした

「…………これで、最後…か…？」

周囲を見回すと、微かに背を向けて逃げ出す賊共の姿が視界の端に捉えられ

「ふう……」

べつたりと付いた血糊を払つ為、今一度左右へと振るつた時

「あ……あれだけの賊をこんな短時間に……！」

先ほどの銀髪の少女  
が驚愕の声を上げながら一刀元へと  
やって来た

「あ……あなたは、いつたい…」

これが

これが、北郷一刀と樂進、真なる名を凪という少女の出会い

「…………」

無言のまま振り返る一刀

やがて

やがて、武人としての己も、少女としての自分すらも捧げると誓つた男との邂逅

鋼鉄と純真なる恋姫の出会い



## 風がかかる時　嵐（後書き）

とりあえず、注意事項として  
この先、桃香は出ません。といつより蜀のキャラの大半が絡んでこ  
ないかも…

小説情報にも乗っけておくので、蜀が好きな人は読まないことをお  
勧めします

## 鋼鉄のこきかた（前書き）

忘れた頃に更新と…

## 鋼鉄のいきかた

張り付いた血糊を弾き飛ばすように腕を振るいながら

「無事か？」

疾走してきた道へと村人達を退避させた銀髪の少女へと返す

炎が催す熱気の渦が… 鋼鉄の男のマントを揺らめかせ

なお、一層のこと

「あ、あなたは？」

「自己紹介もいいが……まずは、火を止めないとには話になら  
んだろう」

「え、ええ…」

銀髪の少女 凪の問いかけに答える一刀は後ろをおつかなびつくりに付いて来て…不安げにこちらを見やる村人達へと

「動ける者は…水が無い者は燃えている物に土を被せろ…それで  
も食い止められる！」

翻したマント越しに大きく叫ぶも… 村人達は不安げな瞳でこちらを見返すものだけで

「……自分達の村だらう……自分達が動かなければ何もかも失うぞ……」

メタルゴーの声音に少しばかり苛立ちを乗せて檄を飛ばす

その聲音に驚いた者達が、めいめいに動き出す

ある者は井戸からひたすら水を汲み出し

ある者は組みあがった水を担いで持つていく

ある者は一刀の直<sup>じき</sup>つとおりに土を搔き集めて火へと被せる

各々が出来ることを行いだす。だが、それでも 火の回りは大きく

「完全に火が回つてゐる家屋は残念だが諦めるしかない……破壊して、周りに延焼しないことを防ぐ！」

動き出した者達の中で、自身の家屋だらう。完全に火が回つてゐる者達が一瞬、動きを止めてしまつ

無理も無いことだらう。そう頭の冷静な部分が告げるの自覚する一刃であるが

「残つた物まで火に巻かれてもいいのか？！まだ、その手に取り戻せるものまで無くしてどうする？！」

さらに激を飛ばす。しかし

「……済まないが君からも言つてもらひえるか？このままでは、本当に

……」

村人達に激に飲み込まれたように黙々と動いてた凧へと告げる  
こして火を食い止める作業を中断せず…

一刀の激に飲み込まれたように黙々と動いてた凧へと告げる

「あ、え…？」

「なんだ？防人もりびとではないのか？」

「え、その…確かに戦える者ですが、自分はそんな

一刀と凧の言葉のやり取りを周りにいる微かな者達が見やる中

「なんでもいい！君は彼らを護る役目を負っていたのなら、少なからずも俺よりかは言うことを聞かせられるだろう？」

「ですが

「問答している暇はないんだぞ？！本当に全部無くしてもいいのか  
？！」

「…なぜ、なぜ…そんなに真剣に自分達のことを

表情を変えることが出来ない鋼鉄の顔。しかし…声音に乗る真剣さ  
は村人達以上ということは

出会いつて微かな凧にも分かるほどに切羽詰つたものであり

「なぜも、くそもあるか……田の前の災厄に手を貸さないよつな肩  
じゃない！俺は！」

匪の問いかけに返しながらもに腰だめに蓄えた力を解放して……土塊つちくずを宙へと舞い上がらせて鎮火させる

「力持ちし者の義務を怠る様では

」

脳裏に浮かぶは

薄い桃色に灰がかかつたようでありながら風に吹かれれば、しゃなるような音を響かせそうな程長い髪を持つ褐色の女

長い艶やかな黒髪を毛先間近で纏めている。その色合いは鮮やかな桃色の牡丹の形のリボンで、それをやきのよくな音を響かせそうな程長い髪を持つ褐色の女

二人の女の姿。共に戦い、共に泣き、共に笑いあつた……掛け替えの無い友

「アソツ等に会わす顔がない……」

血の宿命。繼ぎし家の誇り。その重圧に押し潰されまいと真っ直ぐに立ち続ける姿を

再び舞い上がる突風の中……そう答えた一刀の姿を瞳に焼きつきそうな感情で見やり

「皆ーーかの人の言う通りに動こうつーー」のままでは本当に、本当に全部失くしてしまつーー」

彼女の性格と行動を知る村人達はほんの少しだけ躊躇つむ……迷いを吹つ切るように一層とキビキビと体を動かし始める

「ああ…凪ちゃんの言うとおりだ！その人の言うとおりだ！」

「やうだーまだ、俺達にやあ残つてるモノがあるーー」

口々に自身を励ますように声を上げる村人達

そうして

「ありがとう。今まで…此処まで私を育ててくれて」

凪は燃え盛る…「」の生家を見つめてポツリと呟く

様々な思い出。父と母と共に居た記憶…残された最後の形見へと

走馬灯のように過ぎていいく記憶の中を 最後は鋼鉄の男姿が

焼きついたかのようなその姿を

「父上、母上。凪は……見つけました」

幼き頃から…貧困に喘ぐ村を見てきた

満足に食事を取ったことなど両手で数えるほどかもしれない

満足に遊んだことなどないかもしれない

だが、それでも 父も母も惜しみない愛をくれた

村が良くなる為に、賊共から守れるように

体中に傷を作つても、年頃の娘のように出来なくても……笑つて自分を見守つてくれた大切な人を

「 もはや… 何も手に残りはしませんが……」

この想い出と

構える。幼き頃より鍛えきた……たつた一つの誇れるモノ。武。廻の武を象徴する “ 氣 ” を

「 」の想いを持つて 生きます」

焼きついたその姿。一瞬の開闢。 」で生まれこするのだ……廻の

“ 恋姫 ” は

何時か、かの鋼鉄が 荒んだ世を

「 はあああつあ……」

切り開く時を共に居るために

状況は安定した

鎮火した家屋から燻る煙。黒々になつた村人達の顔に浮かぶ…微かな安堵

上手くいった。何とか、村の三分の一程度で済んだのだから

燃えた家々が崩れ落ちて…広場のような場所になってしまった場所に

村人達が各々、己の家族と抱き合ひ姿

「あの……」

焼けた家の柱をひっくり返して、何かを探しているように動き続ける一刀へと

凪が声を掛ける

「なんだ?…と、やう言えれば自己紹介が済んでいなかつたな」

一瞬だけ凪の声がした方向へと向き直った後…目当てのモノがなかつただろうか?

静かに柱を倒して、他の場所も同じように探しながら答える

「俺は北郷。…………旅の者だ」

苗字を告げ、次いで美羽の近衛と告げようか瞬時した結果

この時代では無難な答えを告げる

「あ、自分は名を樂進。字を文謙。真名を屈と言います!」

一刀の答えに流暢にして大きな声で返す

その答え方に…体が固まり、恐る恐る屈の方へと向く

「…………なぜ、出会つて間もない俺に真名を告げる…………?」

嫌な予感しかしない

一刀がそう返しのも束の間

「おや、おや…お兄さんは手の早っこ」とで

何時の間にか風が一刀の傍へと居り

「風?…」

「あの…どうやら様でしょつか?」

一刀が驚き、屈が?顔を浮かべて風へと問う

「これはこれは…風はお兄さんの臣下であり、肉奴隸であつま  
」

「嘘吐くなー嘘ー」

風の虚言に盛大に言い返す。スルーすれば人としての何かを失くし

てしまつ故に…

「まあ、後半は嘘ですが…お兄さんの軍師しております。程赤と申します」

「…これは失礼しました。自分は名を樂進と申します！以後、お見知りおきくださいませー程赤様」

「はいはい～」

「ちょっと待て。突つ込みきれん…」

風の自己紹介にハキハキと礼儀正しく返す風。その風に軽く返す風  
その物言いと状況　何時の間にか風は軍師。風の言い方はコレか  
らも縁があるような言い回し。風の風を上と見るような言い方

それらに物申したい一刀であるが…

「…ああ、くそ…自己紹介は終わっただろう。取り合えず、邪魔  
しないでくれ

そう言って先ほどと同じように動き出すと

「あの、北郷様は何をお探しに…？」

「……様って、なんだ様つて……」

とボヤクも　空気を引き締めて風へと横田で催促する

それに対する不思議そうにするも… 一刀の横目の先を確認すると

「あ…」

「わかつたろ?… 遺体を探してる。たとえ、黒ゴゲだらうと」

助かつたものが居れば… 助からなかつた者も居るだらう

広場で互いに無事を喜ぶ者達が居れば　亡くした者を捜し求める者達も居る

今、一刀たちの視界に亡骸を見つけたであらう

男が泣きながら炭化した大きな腕と小さな腕に繋り付いている

「見るも無残になつたとしても、家族の下に返してやらなければ浮かばれんだらう」

鋼鉄の瞳であるひとも… 泪は流れるのだろうか?

それは分からなくても　その瞳の中にある悲しみは受け取れる。見て取れる

横目に見た男の姿を見据える一刀の緑色の瞳を匪は見据える

「……?どうした?」

「いえ… 自分も手伝います! あちらから見てきますので」

そう告げて駆け去つていく匪の背を見て

「？」

「鈍いですね～。取り合えず、お一人追加と言つことですね～」

「はあ？」

どの“外史”においても基本的に一刀が一刀であることは余り変わらないのであった……

## 似て非なる金

? 袁紹の居城 門前

「……………どうしてこうなつた」

人体では有り得ない低く鈍い音が体から鳴る

額に自身の手をやつた一刀が発した音であり嘆き

目の前の光景を見やつてのことだ

「大きいですね…」

「そうですね～…現行の北方で最大勢力の方の居城ですからね。嵐ちゃんが驚くのも無理ないかと～」

嵐の咳きに元吹く風の如くに風<sup>フウ</sup>が答える

二人が前方に居れば

「……………とうとう、麗羽姉さまと…ご対面なのじやな…」

「ああ……縮こまる美羽様も可愛らしいです

肩を落として、小さな体をより一層小さくみせる美羽

そんな美羽の姿に「満悦な七乃であり…

「「ひっ…か、かずゅとおおおー…一緒にこいられりい…」

涙目で赤いマントを両手で引っ張られ美羽に迫られる

一刀を“七乃”としての視線と“張勲”としての視線

その一つを持つて見つめる

「しかし…美羽」

「「ひっ…樂進の」

「ぐつ…！だが、美羽。相手は大將軍の位を持つ方なのだろう？」

「ふえ？なんぞ、それは？」

一刀の言葉に？顔となる美羽。それによつて

…そつか。そう言えば没する前の最高位だつたな…

未来人たる一刀の知識の中では大將軍という地位の人物で

思えば…美羽も風も…凪も本来ならば男。なのに…女

激動の日々故に…そんなことを失念していた一刀であるが

…納得できないが、目の前の現実を受け入れるしかないか

…言つたところで詮無いことだ

考え捨てる

「うう… かずと~」

「凪の件を言われると……本当に、大丈夫なのか？俺が同席しても前なのじゅー？」

「一刀は妾の近衛じゃ！近衛というたら、常に傍にいるのが当たり前の件」

無い胸反らして、小さな体でふんぞり返るよつに腕組みする美羽

凪の件。それは…彼女が一刀と臣下として共に付いて来るという件

なんとか火を消しとめ、遺体の片付けも終わった頃に凪からの申し出

それに対し、一刀は強行に反対し…現実問題

火に巻かれた村を再建するにしても護り手の凪が居なければ

同じことが早々に起るるのは明白。故にそれを前面に押し出して諭そうとするも

涙目の凪…終いには涙ぐみ懇願する形になり、それを見かねた風が一計を企てた結果

風の奴…あとで覚えとけよ…

以前の美羽の後ろでアレソレと凪に講義する風を恨めしい視線で見

やる。が

ニヤリと意味深な笑みで余裕綽々の態度

むしり……見返してきた視線で一刀の背中に悪寒が走る様  
頭を振つて腰を折つて美羽の高さに持つていき額くしか選択肢の  
ない一刀であった……

「お～ほほほほほほほ～！まあまあ～よべ、いらっしゃいました美  
羽さん」

全身、金。そう見間違えるような豊かなカールを巻いたふんわりと  
した金髪

礼節用の服であろう……朱色がメインであるが所々にふんだんに金の  
刺繡やら飾りが付いており

最初に見た城の大きさが示すように、懐の潤沢さが前面に押し出さ  
れたような出で立ちに

その高飛車な、ある種のお約束的な笑い上げる人物が

「お、おひそしげりでござります……れ、麗羽姉さま……」

一刀の後ろに逃げ込み。麗羽から隠れる美羽

「あら、美羽さん。そんな所に隠れておら あら、誰ですか？」

玉座。ところわけではないが居城らしく上座に座っていた麗羽が立ち上がり降りてくる

ほんの少しだけある段差。その中央に左右の筆頭たる

「今更ですか…麗羽様…」

ウルウルと瞳を潤<sup>うる</sup>させて嘆きの涙を流すは 袁紹の一枚看板の一人。顔良<sup>とし</sup>こと斗詩

「嘆いてもしようがねえぜー斗詩ー」

額に紺のバンダナを巻く勝氣な少女にして一枚看板の残る一人。文醜<sup>いじじ</sup>こと猪々子

そんな二人の言葉など、どこ吹く風といつよつこ

見定めるように讐め回す視線のままに麗羽は一刀の姿を見回して

「ふーん…まあ、よい作りの鎧<sup>よろい</sup>ですことね。所々に……翡翠ですか。  
それで、名工<sup>めいこう</sup>が作り上げた一品でありますよ」

一刀の姿。鋼鉄の全身鎧姿の各所に埋め込まれた緑の宝玉を指して  
告げ

「流石は美羽さん。此れは私への贈り物ですかね？」

「さつさまで歩いてましたよー麗羽様…」

麗羽の勘違いな物言いに斗詩が突っ込むも

それ以上に

「ち、ちがいますー麗羽姉さまー！一刀は妾の近衛でありますのじ  
やー！」

依然として美羽は一刀の背中に隠れたままであるが

大きく顔を出して麗羽へと一気に早口に告げる。まあ…言ひた後は  
すぐさまに背中へと隠れるが…

「……お初に御眼にかかります袁紹様。私、袁公路様の近衛を勤め  
させて頂いております。北郷と申します」

背後に隠れた美羽が見えないように配慮しながら、片膝ついて頭を  
垂れる一刀

「ほー…美羽さんの近衛ですか。うん？それにしても…えー、あー」

「麗羽様ーもしかして張勲のことですかねー？」

麗羽が一刀を見、そして常に美羽と共に居る女性の名を思い出すやつ  
とすると猪々子が助け舟を出して

片手の掌を軽く拳で叩いて

「そうそう。その方です…その方はどう致しまして?」

麗羽の言葉にちゅうじんと顔を出して斗詩を一警した後

「そこの者に……付き人は一人と言われたのじゃ。じゃから七乃是留守番なのじや」

その言葉に苦笑いと冷や汗を浮かべて

「やうですけど……まさか、張勲さん置いてくるとは思わず……」

斗詩的には全身甲冑たる一刀を牽制する意味合いで一人だけと告げたつもりなのだが

現状、美羽のもつとも興味があり傍に侍りしておきたいと思つ氣持ちが一刀の方が勝つており

まさかの…

「ぐす……みづきまのばか～～…」

「おお、よしよし」

「げ、元気出してください。張勲様」

城の待合室の隅っこでイジケて暗雲を纏う七乃を

風が宝?の手で持つてあやし、風も元気づけるように言葉を紡ぐ光景があつたり…

場面は戻つて

「ふーん… 美羽さんの近衛ですか…」

訝しげな目で頭を垂れる一刀を見下ろす麗羽

物言いたげな視線であるが… 一刀は頭を垂れている関係上

視線の棘には気づいているも主の美羽に泥を塗ることになるゆえに

黙つて甘んじ、美羽は美羽で麗羽への苦手意識の強さに何も言い返すことがなく一刀の背に隠れるのみ

「まあ… よいでしょ。命に代えましても美羽さんをお守りなさい  
な」

「はっ」

「では、美羽さん。今宵は一人で積もる話に花を咲かせましょう

満面の笑みで美羽へとやうび告げて近づくといふあるも

「ううううう、今夜は一刀と一緒に寝るのを約束してあるのじゃー！ 麗羽姉さまー。」

麗羽と一緒に夜を明かす等… 拷問にも等しい

そう考える美羽はこの前の風の同衾事件から未だ果たせていない事

案を前面に押し立てて言い返す

そつ告げられた麗羽が

「……なんですか……」

「ひつ？…？」

爆発するのも無理なことかもしれない…

麗羽の姿に小さな悲鳴を上げてガクガクと体を揺らして一刀にしがみつく美羽

それが余計に麗羽の勘に障り

「み、美羽さん…」この私、この袁本初、麗羽よりも…そこの中腹をお取りになるのですか…」

グラグラと煮えたぎる憤怒が飛び出すのも時間の問題のよつな形相に

より一層と一刀へとしがみつくしかできない美羽。正直、多分…彼女は少しチビッてしまつているに違いないぐらいた

「い、いくり！いくり良い甲冑を纏つてもひつと…」この袁家筆頭たる私の足元にも及ばない雑兵じときが美羽さんと同衾ですって？

！」

怒髪天さながらの狂騒で怒る麗羽。幼いじより可愛がってきた美羽を盗られたという思いが作り出す怒気に…

参ったな……どうするんだよ。これ

頭上で行われるやり取りに内心で溜息を吐くしかない一刀

一刀から行動を起こせばどうなるかわからない。仕方なく現状維持かといつて麗羽が自体を収められるわけもなく。彼女も現状維持となれば……

「い、猪々子さん！」

「はいな」

「殺つておしまいなさい……！」

「あらほりやつせ」

「つて、待つてください麗羽様！文ちゃんも斬山刀さきさんとう持ち出さない！」

麗羽の激発に簡単に承諾する猪々子。その二人を止める斗詩

中世のグーレトソードを沸騰させる野太い力で押し潰す大剣を持つ猪々子を物理的に押し止め

再度、麗羽へと斗詩は言い募る

「れ、麗羽様！そんなことしたら」「

「黙りなさい！――斗詩さん！猪々子さん、早くねやつなさい！――」

金切り声そのままに絶叫する麗羽の殺氣の様な感情を頃で感じ取りながら…

正気か？資料のような人物とは到底思えん……しかし

幾らか知つてゐる三国志の人物象に載る姿とまるで違つ麗羽の様子に

性別が変わっている世界だ……瓜一つとはいかんか……まあ、

まるで現在の状況がどうにでもなるような心境で

。子龍並みならいぞ知らず。

伝わつてくる喧騒の中…大剣を持つ猪々子の腕前を大体把握しながら

刃渡りが長い。美羽に当たらないようにしなければ

何時でも体が反応するように構える

一触即発の空氣の中動き出したのは

張り裂けるような泣き声を上げだす美羽だった

場の空気が一瞬にして気まずいモノに……

麗羽が猪々子を見やり、猪々子が斗詩を見やり、斗詩が両手を挙げて涙目になるも

三人は誰も動き出すことができず

「うううええええええ———————！」

「美羽。おいで」

「か、かずゅつとおおおお……」

ただ一人、頭を垂れていた一刀だけが身を起こして

片膝ついたままに美羽へと振り返り両手を差し出して懷を空ける

間髪いれずに鼻水たらして涙声のまま、一刀を呼びながら飛び込む

くしゃくしゃになつた小さな顔を鋼鉄の胸板に押し付けながら

そうして美羽を懷に抱きいれた一刀はそのまま抱っこして立ち上がり

「我が主は気分がよくない」と様子

立ち上がり背を向けたままに麗羽たちへと紡いでいく。淡々と

「失礼であるが、近衛たる私にとつては主の『気分が優れない場所に主を置くのは身が引き裂かれる思いだ』

遠まわしに

「袁紹殿には失礼であられかもしけませんが……」の場合は引かせて頂きたく存じます」

### 有無を言わぬ言葉

「余興は誠、我が主の身を震わせる結果となりまして甚く感謝致しまする」

興奮と歓喜に震わせるも悲壮と恐怖に震わせるも…どちらも結果は身が大きく揺れるのは同じ

痛切にソレを皮肉つて

「つきましては後日。私直々がお礼をさせて頂こう存じますゆえ…

そう冷徹に言い切つて室内から静かに出て行く

「……文ちゃん」

「ああ。アタイよりも強いさ、それは知つてゐけど」

肩で担ぐように持つ大剣を降ろしながら

「勝負は博打。勝つも負けるもその日の運! 麗羽様の命もあるしな」

そんな一枚看板の二人とは違い…

「きこ～～～～! 美羽さんを抱っこしていいのは私だけですわーー

ーー」

「 「ああ…………そっちですか」 」

麗羽の見当違いな怒りに一人揃つて溜息を吐いた

?から陳留 街道 袁家馬車

「それで出てきたわけですか～？」

風の質問を皮切りに

美羽以外の全員の視線が一刀に集中する

泣き疲れて腕の中にはいる美羽をあやしながらに

舗装された道とは異なり、ガラガラとけたたましい音を上げている  
にも関わらず

安心しきつた寝顔を見せる美羽とそれを抱える一刀を中心に

左は風。右は七乃。御者には凪という配置で話が進む

「…………」ちらりも袁家直流の血筋を持つ美羽だ。ベストとは言わない

が…ベターな選択だつたとthoughtしたい」

「?.べすと?.べたー?」

「……意味のわかる言葉で書つてください。“島国”特有の言葉は大陸では通用しませんよ」

風が一刀の話の中で理解不能の言葉を舌足らずな言いで復唱し七乃が憮然とした顔つきでつっけんどんに返す。美羽が一刀の腕の中というのが気に食わない為に

「ベストが最高。悪くないがベター。」の場合…最高ではないが悪くない選択といふ意味合いだ」

七乃の物言いを気にする」となく説明する

「ふむ~……まあ、追つてがかかる事から問題は無かつたようですね~」

暢氣に糸田になじながらも

「ですが…結果が良かつただけの事、あまりこいつ対応は良くないですよ。これからはちゃんと風を連れてくださいな~」

「…そつか」

「あんまし納得いつてないみたいですね~お兄さん。まあ、確かに着眼点はよかったです…お兄さんは獻くまで袁術様の一臣ト」

ピッとかぶ？が抱えていたキャンパーの棒を掴んで一刀へと向け

「それを超えている部分がありありと見えておりますね～聞いた感じでは～」

間延びした聲音とは裏腹に心配げな感情が少し含まれた視線

「……あまりこういうモノは俺には向いてないな。やはり、“アイツ”の真似事が精々か…」

脳裏に浮かぶは…親友の破天荒な行為に毎度、掛けた眼鏡のズレを直しては怒氣を抑えていた黒髪に褐色肌の女

「…今。風以外の女性を思い浮かべましたね」

本当ならば頬でも太ももでも抓つてやりたい風だが……あいにく相手は鋼鉄の体ゆえに恨めしい視線を向けるしかない

「?なぜわかる?」

思案顔で思いを馳せていた一刀は風の言葉に疑問を浮かべた空気を纏つて返す

御者をしている凧からも…その発言で少し身が固くなつたが一刀には察せず

「お兄さんは…もう少し女性の扱い方も覚えたほうが宜しいですね～風がみつちり叩き込みます。凧ちゃんもお願ひしますね」

「?…じ…自分は、その…」

冷たい視線で返しながら風へと振る。当の風はあたふたと答えるしかなく…しじろもじろになりながら馬車を操り

「とりあえず、脱線していますから戻しますよ。まあ…北郷さんが美羽様を思いやつての行動ですから、それ自体には文句は言いませんが」

剣呑な雰囲気の七乃が脱線しまくつていい話を戻し

「相手が“袁紹さん”でなければ…今頃は程赤さんの言ひつけおりに追っ手が放たれていたと思いますよ?」

表情はほんわかな笑顔なれど…先ほどから雰囲気と痛いくらいの視線で一刀へと言い放ち

「もう少し、慎んだ行動を心がけてくださいませ。ですので…美羽様は私が預かります」

言いたい事を伝え終えた七乃是、そのまま一刀から引っ越し繰る様に眠る美羽を抱き寄せて

一刀と距離を少しでも取るように、狭い馬車の隅へと寄る

それに対しても肩をすくめる一刀。そんな一刀をわかつてないな…という視線で温かく見守る風

「あ、いえ…その、嫌ってわけではなくて…ですね。その、自分は…体中傷だらけで…」

御者をしながらも風の言葉にいまだにモジモジと身をしおりませる  
凪であった

そうして……風から現状の情勢やらなんやら聞きついた一刀達一行

「……地鳴りがします。一刀様、風様、張勲様。」用心を

「ああ。それと凪……次、様つきで呼んだら説教な」

「そ、そんな?...どうお呼びしろとこうのですか?...」

御者を務める凪の耳に……数十の馬が行軍する独特のけたたましい蹄の音が届き

顔を引き締めて一刀達へと警戒を呼びかけるも、一刀の一言によつて一度崩される

が……油断ない一刀が馬車より降りてきた空氣で風も一瞬で持ち直す  
目前には街道の道しかないが……音が鳴り響くは街道脇。一刀達から  
見ていた左の方面の丘より

数十騎の群れ。誰も整然とした動きであり、統一された武具を纏う  
兵士。軍

その色は濃紺が基本色となり

「全体止まれえつええつええ！－！」

軍の先方を駆けていた三人組みの一人

おでこを全開にした長い黒髪を持つ赤を基調とした鎧服に纏う女性の声に

付いて来ていた者達が一斉に止まる

「済まぬが、そこの旅人達よ。付近で十人前後の人群れを見なか

」

武装した兵士達が丘から現れ、街道へと乗りつけた

それだけを見れば警戒に値するものであり。当然、一刀達…と言つても鬪えるのは凪と一刀の二人だけ

そもそも外に身を曝しているのも二人だけであるが、そんな二人に警戒を解くように柔らかに声をかける始める。途中で息を呑み、一刀を驚愕の眼で見やりながら

先の声を上げた女性とは対象的な青を基調とした鎧服

髪は短髪にして空色。先の女性が勇猛そうであれば、彼女は理知的な雰囲気を持っている

「秋蘭？どうしたの？」

空色の髪を持つ女性に中央。両脇をつめる一人とは対照的に幼い…

いや、少女と並んでいた背格好

先の麗羽のよつな…… 淡い金とは違う。しつかりとした輝きを放つ  
よつな金髪を両サイドにクルクルと巻いた髪型

そつして

「はっ！ いえ…… 何でもございません。 華琳様」

「……ならいいわ」

どんな仕草をしても、彼女は絵になるであつと一刀は直感する

その身に纏つ。いや 織りつかれる負えない

身の丈とは比べられないほどの一刀は直感する

優雅に馬上から一刀を見下ろす表情は

「貴方達、この近くで人影を見なかつたかしら？」

霸王の片鱗を内包している

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7846o/>

---

恋する姫と鋼の男

2011年9月9日01時32分発行